

第37回「糖尿病学の進歩」に参加して

コメディカルの立場から

田嶋 佐和子

「第37回糖尿病学の進歩」は、「チームで闘う糖尿病」のテーマのもと、多くの糖尿病治療に携わる医療従事者が参加し、会場は熱気に包まれていた。今回、コメディカル(栄養士)の立場から見た「糖尿病の進歩」について報告したいと思う。

2月21日午後から「特別な管理を要する糖尿病」として、シンポジウムが行われた。「肥満糖尿病」、「小児-若年者」、「妊娠」、「高齢者」、どの対象も、各対象者が持つ問題点に対し、基本の糖尿病療養指導+ポイントとなる点を考慮に入れた指導を行うべきであることを知ってはいても、実際に指導する機会は少なく、ポイントがあいまいになってしまいがちである。あらためて、本シンポジウムでは、ポイントとなる点を整理して聞くことができた。その後、同会場でOff Line Discussionとして、シンポジウムに続く形で症例をもとに、治療の実際を聞くことができ、私たちが指導側として知っておくべきポイントと、糖尿病患者を受け入れる病院として、糖尿病妊婦の食事など準備しておくべき点が見えてきた。

22日午前には、コメディカル向けに「療養指導の実際」のレクチャーが行われた。最初に食事療法では患者中心の栄養指導の有効性の話があり、続いて服薬指導、SMBGによる血糖自己管理の話が行われた。これらのレクチャーから、薬・イ

ンスリン製剤ともに多種多様となり、患者それぞれのライフスタイルにあった薬物療法が選択できる可能性が感じられ、さらにSMBGというツールは、うまく使いこなせば、個々の患者に応じた患者中心の療養指導を後押しできると思われた。

本会全体を通じて、随所で「心理と行動」、「患者中心」、「ヘルスプロモーション」といった言葉が多く聞かれた。私たち、糖尿病療養指導に携わるものは、糖尿病療養指導には「患者心理」の理解が必須であると日々感じている。しかし、本会に参加して改めて、「患者心理の理解」と同時に、患者の思いを支えるには、より多くの治療方法があることを、これまでの研究や最新情報とともに患者にうまく伝え、選択の幅を持っていただくことも大切であると感じた。今後も「糖尿病学の進歩」が、療養指導の場における心理面の知識を得る場、糖尿病に関するベースの知識と最新知識といった情報を得る場となり、調和のとれた会としてますます発展していくことを願っている。M

たしま さわこ

関西医科大学附属病院 栄養課・管理栄養士
(〒570-8507 守口市文園町10-15)